

編集後記

生成 AI をはじめとする情報技術の急速な進展は、創作活動や研究開発の手法・スピード・規模を大きく変えると同時に、知的財産制度が長年依拠してきた前提そのものを揺さぶりつつあります。AI はもはや特定の専門家だけの道具ではなく、創作活動や研究活動はもちろん、日常的な業務や生活の中にも自然に組み込まれつつあり、「AI を使うか否か」ではなく、「いかに使い、いかに向き合うか」が問われる段階に入ったと言えるでしょう。

本号の巻頭言では、渡部俊也先生に「AI 時代における知的財産制度の変容——特許制度を中心とした法制度・知財経営の再設計——」をテーマとして、AI が発明創出プロセスに自律的かつ深く関与する時代における特許制度の構造的課題について、非常に示唆に富むご論考をご寄稿いただきました。AI の普及によって、発明の主体、責任やリスクの引き受け、人間の役割といった問題を、単なる制度解釈の問題にとどまらず、より根源的な問いとして捉え直す視点は、今後の議論を進める上で重要な手がかりとなるものと思われま

す。そして、とりわけ印象的なのは、AI 時代の知財戦略について、500 年以上にわたる知的財産制度の歴史を振り返りながら、その原点にある「リスクを引き受け、成果を社会に実装する」という側面が、むしろ AI 時代においてこそ一層重要になるとの指摘です。無数のアイデアや設計案が AI によって生成され得る環境では、価値の源泉は単なる発想そのものではなく、「何を選び、誰が責任を持って実装するのか」に移っていきます。知財戦略もまた、「選び抜き、やり切る」ための戦略として「原点への回帰」で捉え直す必要がある、という問題提起は、AI 時代の知財戦略の在り方を考える上で多くの示唆を与えるものと言えるでしょう。

近年、国内外の特許庁や関係機関では、生成 AI の利用を前提とした審査実務の検討や、研究・開発現場における AI 活用に関する指針づくりが進められています。他方で、AI 技術の進展は極めて

急激であり、制度や運用が常に技術の動向を追いかける形にならざるを得ないのも現実です。そうした状況において、知的財産制度がどのように技術の社会実装を支え、どの部分で人間の判断や責任を位置づけていくのかは、引き続き、技術進歩の状況を見定めつつ、国内外の関係機関による検討と国際的な議論を要する課題であると言えるでしょう。

技術の進歩が加速する時代にあって、知的財産制度は常に「変わるべきもの」と「守るべきもの」の間で問い直されてきました。本号に収められた各論考は、生成 AI をはじめとした新たな要素を前にしながらも、知的財産制度がこれまで果たしてきた役割や、その背景にある考え方を改めて見つめ直す視点を提供してくれます。本号が、読者の皆様にとって、新たな時代における知的財産制度の役割や可能性について思考を深める一助となれば幸いです。

INPIT 人材開発統括監
福田 聡

特許研究 PATENT STUDIES No. 81 (March 2026) ©

令和8年3月31日発行

編集・発行 INPIT (独立行政法人 工業所有権情報・研修館)
特許研究室



〒105-6008

東京都港区虎ノ門 4-3-1 城山トラストタワー8階

電話 : 03-3581-5092 FAX : 03-5843-7693

HP (<http://www.inpit.go.jp/index.html>)

印刷所 株式会社まこと印刷

※落丁・乱丁本はお取り替え致します。